

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	24-087	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Neurocognitive Latent Factors Associate With Early Tobacco and Alcohol Use Among Adolescent Brain Cognitive Development Study Youth 青年期の脳認知発達研究における神経認知の潜在因子と早期のたばこ・飲酒との関連		
執筆者		
Jones SK, Benton ML, Wolf BJ, Barth J, Green R, Dolan SL.		
掲載誌		
J Adolesc Health. 2024 Dec;75(6):874-882.doi: 10.1016/j.jadohealth.2024.06.017.		
キーワード	PMID	
青年期、アルコール、物質使用、メンタルヘルス、神経認知、リスク因子、たばこ	39140930	
要 旨		
<p><b>背景：</b>青年期以前の神経認知機能と青年期における物質使用の開始との前向き関連は、これまで十分に検討されてこなかった。本研究では、9～10歳児の神経認知機能と、13～14歳までにたばこやアルコールを経験する可能性との関連を検討した。</p> <p><b>方法：</b>9つの神経認知評価の主成分(PC)分析を用いて、血縁関係のない思春期脳認知発達研究参加者(n=9,655)の認知構造を同定した。神経認知PCと13～14歳までのタバコやアルコールの使用オッズとの関連を、ロジットリンクモデルと採用施設のランダム切片を用いた一般化線形混合モデルを用いてモデル化した。人口統計学、家族の葛藤、近隣の安全性、外向的行動と内向的行動を共変量とした。</p> <p><b>結果：</b>4つの神経認知PC(一般的能力、実行機能、学習と記憶、メンタルローテーション)が特定された。メンタルローテーション得点が高いほど、たばこ使用のオッズが低下した(OR=0.88、p=0.013)。この関連は特に女子で顕著であった。一方で、男女共通の一般的能力(OR=1.20、p&lt;.0001)、および女子の学習と記憶(OR=1.11、p=0.024)は、飲酒のオッズ増加と関連していた。</p> <p><b>結論：</b>青少年において神経認知機能が高いことは、たばこ使用の予防要因となる一方で、飲酒のリスク要因となる可能性が示唆された。また、性差の存在も認められた。たばこおよび飲酒を取り巻く社会的背景を認知的に処理する力が、米国の青少年における物質使用に対する異なる期待の形成に寄与している可能性がある。</p>		